

キャベツ（平坦地夏まき）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
作 型												
主な作業	病害防除 播本定追中害追収 種圃準植肥土除肥穫											

技 術 体 系

1 作型の特徴

盛夏に播種し、秋から早春にかけて収穫する作型。
この作型では、生育とともに気温が下降に向かうので、作柄・品質は安定し栽培しやすい。

ただし、育苗が高温期にあたり、台風等の気象災害や病虫害被害を受ける危険性は高い。

2 適応地域

平坦地域

3 栽培条件

（1）温度

5～28℃で生育し、生育適温は15～20℃である。耐暑性は弱く、23℃を越えると生育が鈍り、28℃以上になると生育を停止する。

耐寒性は強く、－4℃までは寒害を受けない。寒さに徐々にならされれば－8℃にも耐え、一時的なら－18℃にも耐えるとされる。

（2）土壌条件

土壌適応範囲はきわめて広い。最も生育が良いのは砂質壤土から粘質壤土である。

保水性が良く、かつ排水性も良いことが適地の条件となる。

pHの適応範囲は5.5～6.8である。5.5以下になると生育が衰え、著しく減収になる。

土壌が酸性に傾くと根こぶ病の発生を助長する。

4 施設装備

（1）育苗ビニールハウス

（2）キャベツ移植機

（3）管理機

（4）動力噴霧機

（5）大区画圃場栽培では、あれば望ましいもの

①セル専用土入れ機＋セル成形播種機

②シャトルスプレイカー

③乗用型全自動移植機

④ブームスプレーヤー

5 経営目標

（1）収 量 5 t／10a

（2）投下労働時間

①慣行作業体系：110時間／10a

②大型機械化体系：85時間／10a

（3）所 得 率 50 %

（4）経営規模(家族労働力2人の場合)

①慣行作業体系：300a

②大型機械化体系：400a

栽 培 技 術

1 品種と特徴

「冬風」

①萎黄病に強く、低温結球性と耐寒性にすぐれた栽培容易な冬どり品種。

②定植後80余日で収穫可能な中生の多収種。株張りは中位でやや立性、強勢で密植しても生育はよく揃う。

- ③球は甲高扁円球で、球芯が低くて細い。球色はやや濃く、葉肉はやわらかく多汁で甘味があり、食味は上々。耐寒性と低温結球性に優れるうえ、早熟性もあるので、遅植えもできる。
- ④暖地での最終定植は10月7日頃まで。

「彩ひかり」

- ①黒腐病に強い耐病性、萎黄病に抵抗性。作りやすい冬どり中生種。
- ②外葉は強健で草姿は中位性。球揃い良好。低温肥大性にすぐれ、厳寒期の肥大と揃いも良好。
- ③球形はボリューム感のある扁円形で、播種期による球形変化が少ない。
- ④球色は鮮緑色で、厳寒期でも球面のアントシアニン色素が発生しにくく、球内色も黄色味が強い。
- ⑤結球後の耐寒性や耐裂球性にすぐれ、収穫期の幅が広い。

「豊光」

- ①夏まき、冬～早春どり用として、特に遅播き遅穫りに好適な晩生種。暖地では8月15日～25日の播種が最適。
- ②苗は強健でよく揃い、湿害にも強く栽培が容易。
- ③球は明るい鮮緑色、形状のよい甲高扁円形で1.5kg程度に太る。低温結球性が優れ、早くから結球するので若切りもできる。
- ④極晩抽系で芯の伸びが非常に遅いので、堅くしまりながらも裂球は遅く、品質の低下も少なく、収穫期の幅が広い。
- ⑤暖地での最終定植は10月10日頃まで。

2 育苗

準備するもの(10a 当たり)

- ①128穴セルトレイ：41トレイ
- ②育苗用土(MKK野菜用床土)：7袋
- ③種子
- ④育苗ハウス
- ⑤型付けローラ
- ⑥大区画圃場栽培では、あれば望ましいもの
セル専用土入れ機+セル成形播種機
- (1) 播種

留意事項：高温期の播種は、夕方行う。

- ①128穴セルトレイに育苗用土を均一に入れる。
- ②十分に灌水する。
- ③用土に水がなじんだら、型付ローラで播種穴をあける。
- ④1穴に1粒播種する。
- ⑤バーミキュライト等で覆土する。
- ⑥軽く灌水し、不織布等を掛けて発芽させる。
- ⑦納屋など風通しの良い日陰で、トレイを積み重ねる。
- ⑧試しに2～3穴の覆土を取り除き、芽が切れていれば育苗ハウスへ移す。
- ⑨ハウス内では、育苗棚やブロック等の上にパイプやたる木等を置き、その上で育苗する。
- ⑩換気を十分に行い、高温多湿にならないように管理する。
- ⑪灌水は、子葉が展開するまでは基本的には行わず、その後は用土の表面が乾かないように行う。
- ⑫播種後15日目頃から液肥による追肥を行う。

3 本圃準備

- ①定植20日前までに、炭酸苦土石灰を全面散布後よく混和し、pH調整(pH5.8～6.8)を行う。
- ②排水対策として、エアーインジェクターによる弾丸暗きょや溝掘り機による明きょを施す。
- ③完熟堆肥を10a当たり2t以上施し地力の増進を図る。
- ④基肥を施す。

	施肥量 (kg/10a)		
	N	P ₂ O ₅	K ₂ O
基肥	12	20	10
追肥	12	—	10
全量	24	20	20

4 定植

- ①定植苗
本葉：3～4枚
草丈：10～12cm

②栽植様式

畦幅 110 cm × 条間 40 cm (条間 40 cm、
2 条千鳥) 大区画圃場 (高知下水位地帯)
畦幅 135 cm × 条間 30 cm (条間 50 cm、2
条千鳥)

③灌水

高温期は、定植の 3～4 時間前を目安に十分に
灌水する。

④防除

オルトラン粒剤を、一株当たり 1～2 g 処理す
る。

⑤植え付け

深さは、根鉢がすべて隠れる程度に定植する。

5 定植後の管理

(1) 追肥

追肥は 3 回分肥とする。

① 1 回目：活着後、株元から 15 cm くらいのと
ころに施し、軽く培土する。

② 2 回目：定植後 20 日目に畦肩に施し、培土を
行う。

③ 3 回目：結球開始期に施す。

また、後半が低温期の生育となり、ホウ素欠乏
症が出やすいので、ホウ素入り化成またはホウ砂
(10 a 当たり 1 kg 程度)を施用する。

(2) 防除

定植後の病害としては、黒腐病、菌核病が特に
問題となる。

害虫はコナガ、アオムシ(モンシロチョウ)、ア
ブラムシ、ヨトウムシ、ハスモンヨトウが 11 月
中旬頃まで発生する。

そのため、秋期には害虫、冬季には病害の防除
を特に留意する。

6 収穫

他の作型より裂球は遅いので、収穫期の幅は広
いが、収穫適期に努め、品質低下を生じないよう
にする。